

ブロアのスティーヴン王とエムプレス=モード

King Stephen de Blois and Empress Maud

川 瀬 進

目 次

- I はじめに
- II 王位継承
- III 内乱
- IV おわりに

I はじめに

ヘンリー1世 (Henry I, Beauclerc, 1100-1135) が、1135年12月1日、大好物のヤツメウナギの食べすぎにより、食中毒で亡くなった¹⁾。

その後、イングランド王位を継承したのは、ウィリアム1世 (William I, the Conqueror, 1066-1087) の孫、ヘンリー1世の甥、ヘンリー1世の妹アデラ (Adela, c. 1062-1137) とブロア伯エティエンヌ=アンリ (Étienne Henri, Count de Blois, c. 1045-1102. 5. 19) との3男・ブロア伯エティエンヌ (Étienne de Blois, c. 1096-1154. 10. 25) である。

ブロア伯のエティエンヌが1135年12月22日にイングランド王に即位し、そ

1) Austin Lane Poole, *From Domesday Book to Magna Carta 1087-1216*, in George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 3, Second Edition, Reprinted of 1955, ed., Oxford University Press, 1986, p. 130.

2) Plantagenet Somerset Fry, *The Kings & Queens of England & Scotland*, Reprinted of 1990, ed., A Dorling Kindersley Book, 1993, p. 34.

・ブロア伯エティエンヌのイングランド王への戴冠式の日を、1135年12月22日としている書物が多いが、本稿では、プラントジネット=サマーセット=フライ氏の研究のように、即位日が1135年12月22日、戴冠日が1135年12月26日と区別している上記の研究書を採用した。すなわち、本稿では、ブロア伯エティエンヌがイングランド王に即位した日が1135年12月22日、ウェストミンスター=アベイ (Westminster Abbey) で戴冠した日が1135年12月26日とした。

して、1135年12月26日に、ウェストミンスター=アベイ (Westminster Abbey) で、戴冠式を挙げ、イングランド王スティーヴン (Stephen de Blois, 在位1135-1154) になった²⁾。

イングランド王に即位したスティーヴンには、行政を司る以前に、難題が降り懸かってきた。

というのは、スティーヴンの王位継承に対して、異議ありとして、ヘンリー1世の娘、神聖ローマ皇帝ハインリッヒ5世 (Heinrich V, c. 1081-1125: 在位 1106-25) の未亡人、アンジュー伯ジェフリー=プランタジネット (Geoff Plantagenet, Count of Anjou, d. 1151) の妻であるエムプレス=モード (Empress Maud, 1102-1167) が、クレームをつけてきたからである。

このクレームが、イングランドの内乱へとなった。

では、この内乱を、スティーヴン王は、どのように対処しなければならなかったのであろうか。

そこで、本稿では、このクレームに対して、スティーヴン王が、どのように対処したのであろうか、また、その対処が、イングランド国民にとって、利益があったのであろうか、を考察する。

II 王位継承

ヘンリー1世後の王位継承権は、法的に順調にいけば、エディス=マティルダ (Edith Matilda, c. 1080-1118) との間に生まれた、唯一の嫡男、ウィリアム=ジ=アセリング (William the Aetheling, 1103-1120. 11. 25) であった。

だが、この王位継承は、順調に行かなかった。

というのは、1120年11月25日、ヘンリー1世に付き添っていた、法的王位継承者の長男、ウィリアム=ジ=アセリングが、フランスのノルマンディー、バルフルール (Barfleur) からイングランドに帰る途中、乗船したブランシュ=ネフ (フランス語名、La Blanche Nef: 英語名、ホワイト=シップ、White Ship) が、海難事故に遭い、亡くなったからである。

1118年、ヘンリー1世は、フランス王、アンジュー伯、フランドル伯の攻撃

から、ノルマンディーを守るために、大陸に渡っていた。

結果は、1120年、ヘンリー1世が勝利し、イングランドに帰国することになった。

1120年10月7日、イングランドに帰国するに際して、ヘンリー1世は、トーマス＝フィッツ＝ステイーヴン (Thomas Fitz-Stephen) から、新船、ブランシュ＝ネフ (La Blanche Nef：ホワイト＝シップ、White Ship) の提供を受けた。

だが、ヘンリー1世は、このブランシュ＝ネフ (ホワイト＝シップ) の提供を、断った³⁾。

その断った理由は、ヘンリー1世が、すでに帰国のための船舶を、準備していたからである。

その代わり、ヘンリー1世は、ブランシュ＝ネフ (ホワイト＝シップ) には、法的王位継承者の長男、ウィリアム＝ジ＝アセリングをはじめ、法的には王位継承者ではない庶子ウィリアムや、リチャードを、乗船させることにした⁴⁾。

ヘンリー1世は、ブランシュ＝ネフ (ホワイト＝シップ) よりも先に出航し、無事イングランドに帰国した⁵⁾。

ヘンリー1世がこのブランシュ＝ネフ (ホワイト＝シップ) の遭難を知ったのは、翌日の11月26日であった。この日を境にして、すなわち長男のウィリアム＝ジ＝アセリングの死を知ってから、ヘンリー1世の将来計画は、挫折した。

ブランシュ＝ネフ (ホワイト＝シップ) の海難事故は、人為的な事故であった。

というのは、ブランシュ＝ネフ (ホワイト＝シップ) が、十分な準備を少なく、定員オーバーで、またクルーや漕ぎ手たちがワインの飲み過ぎで、左舷を大きな岩盤にぶつけ、転覆させたからである⁶⁾。

3) W. Farrer, Litt. D., "An Outline Itinerary of Henry the First: Part II," *The English Historical Review*, Vol. 34, 1919, p. 513.

4) W. Farrer, Litt. D., *The English Historical Review*, Vol. 34, *ibid.*, p. 513.

5) W. Farrer, Litt. D., *The English Historical Review*, Vol. 34, *ibid.*, p. 513.

6) C. Warren Hollister, *Henry I*, Reprinted of 2001, ed., Yale University Press, 2003, p. 277.

なお、このブランシュ=ネフ（ホワイト=シップ）に乗船していたヘンリー1世の甥、ブロア伯エティエンヌは、自らの体調不良（下痢）と、酔っ払ったクルーたちの状況とを判断して、下船した⁷⁾。

1120年11月25日のウィリアム=ジ=アセリングの死は、イングランドの王位継承権において、新たな火種を持ち込んだ。

その火種とは、ヘンリー1世の兄ロベール2世（Robert II, Robert Courteheuse, c. 1054-1134）の長男、ノルマンディー公ギヨーム=クリト（Guillaume Cliton, 1102-1128）が、イングランドの王位継承権を要求していたからであった。

このノルマンディー公ギヨーム=クリト要求は、ウィリアム=ジ=アセリングの死後、ますます強くなった。

ヘンリー1世は、ノルマンディー家によるイングランド王国存続のため、また、ノルマンディー公ギヨーム=クリトに、イングランド王位継承権を譲りたくないため、結果的に、男子相続人を儲けたいという希望のため、1121年1月29日、再婚することにした。

その再婚相手は、アデライザ=オヴ=ルーヴァン（Adeliza of Louvain, c. 1102-1151）であった⁸⁾。

だが、ヘンリー1世とアデライザ=オヴ=ルーヴァンとの間に、嫡男は、誕生しなかった。

未だに、男子相続人のいないヘンリー1世は、甥で温和なブロア伯エティエンヌを、我が子のように可愛がっていた。

この可愛がった理由には、2つある。

1つ目は、ブロア伯エティエンヌの父、ブロア伯エティエンヌ=アンリが、

7) ・George Burton Adams, *The History of England from the Norman Conquest to the Death of John* (1066-1216), in William Hunt and Reginald L. Poole, eds., *The Political History of England*, Vol. 2, Reprinted of 1905, ed., Ams Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 169.

・C. Warren Hollister, *Henry I*, *op. cit.*, p. 277.

8) C. Warren Hollister, *Henry I*, *ibid.*, p. 280.

第1回十字軍の遠征に参加し、1102年5月19日に戦死していたからである。

2つ目は、ヘンリー1世の法的王位継承者の長男、ウィリアム=ジ=アセリングを、ブランシュ=ネフ（ホワイト=シップ）の海難事故で、1120年11月25日に、亡くしていたからである。

この2つの理由の内、特に長男、ウィリアム=ジ=アセリングを亡くしてから、ヘンリー1世は、甥のプロア伯エティエンヌを、我が子に重ね合わせるようにして、可愛がった。

なおこの頃から、ヘンリー1世は、王位継承を、甥のプロア伯エティエンヌへと、多少考えながらも、実子の長女アデレード（Adelaide, 1102-1167：後のエムプレス=モード：Empress Maud）へと、強く考えるようになっていった。

長女アデレードは、1114年1月7日、神聖ローマ皇帝ハインリッヒ5世（Heinrich V, c. 1081-1125：在位 1106-25）と結婚し、エムプレス（Empress：皇后）になっていた。また、この結婚により、長女アデレードは、エムプレス=モード（Empress Maud）と呼ばれるようになっていた⁹⁾。

そしてその後、長女アデレードは、1125年5月23日、夫ハインリヒ5世が死去したことにより、未亡人エムプレス=モードになった¹⁰⁾。

この1125年に、ヘンリー1世は、可愛がっていた甥のプロア伯エティエンヌに、スコットランド王マルカム3世カンモー Malcolm III Canmore, 1031-1091) の孫娘、父ブーローニュ伯ユースタス3世（Eustace III, Count of Boulogne, (?) -1125）と、母マルカム3世の娘メアリ=ドゥケルト（Mary Dunkeld, (?) -1116）との娘である、マティルド=オヴ=ブーローニュ（Matilda of Boulogne, c. 1105-1152）と結婚させた¹¹⁾。

ヘンリー1世は、未亡人になった長女、エムプレス=モードを、イングランドの王位を継承させるために、1126年9月、イングランドに呼び戻した¹²⁾。

9) C. Warren Hollister, *Henry I, ibid.*, p. 219.

10) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 175.

11) Allen Andrews, *Kings & Queens of England & Scotland*, Reprinted of 1976, ed., Marshall Cavendish, 1994, p.38.

12) Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda; Queen Consort, Queen Mother and Lady of the English*, Reprinted of 1991, ed., Blackwell, 1993, p. 44.

ヘンリー1世は、イングランドに呼び戻したエムプレス=モードを、1127年1月、法的に後継者に指名し、そして、その指名を内外に周知徹底させるために、後継者指名を、バロン（Baron：国王から直接に封土を受け取っている家臣：貴族）たちに、強制的に誓わせた¹³⁾。

イングランドの王位継承者に、エムプレス=モードを認める、ということ、ヘンリー1世に宣誓した者の中には、ヘンリー1世の庶子のひとり、エムプレス=モードの異母兄である、グロスター伯ロバート（Robert, Earl of Gloucester, c. 1090-1147）、ヘンリー1世の甥ブロア伯エティエンヌ、エムプレス=モードに、血縁関係である伯父・スコットランド王デイヴィッド1世（David I, 1084-1153：在位1124-1153）がいた¹⁴⁾。

なお、このグロスター伯ロバートは、プリストル（Bristol）を含む、イングランド南西の広大な土地を領有していた。

また、デイヴィッド1世は、母がウィリアム1世の姪ジュディス（Judith of Lens, c. 1054-1086）、父がハンティングダン、ノーサンプタン、ノーサンバーランドの伯領ワールセオウフ（Waltheof, Earl of Huntingdon, Northampton, Northumberland, 1050-1076）であり、サイモン=ドゥ=セントリス（Simon de St Liz, 1st Earl of Northampton, d. 1109）の未亡人モード（Maud, Countess of Huntingdon, 1074-1130）と、1113年に結婚していた。

この結婚により、デイヴィッド1世は、ハンティングダン伯になり、イングランド北部ノーサンバーランドの領主になっていた¹⁵⁾。

このような後継者指名に対して、バロンたちは、ヘンリー1世に対し、不満を募らせた。

というのは、この女子の王位継承者の指名を、ヘンリー1世により、強制的に誓わされたからである。

直系の後継者を望むヘンリー1世は、1129年6月17日、長女で未亡人の、エ

13) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 176.

14) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 176.

15) Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol. 1, Reprinted of 1903, ed., New York: Ams Press, Inc., 1970, p. 102.

ムプレス=モードに、アンジュー伯ジョフロワ4世 (Geoffroi IV, Earl of Anjou, 1113.7.24-1151.9.7) と再婚をさせた¹⁶⁾。

この再婚は、ヘンリー1世が、ノルマンディー家を安定させるために、アンジュー家を味方に入れ、そして王室強化を図った、政略結婚であった。

また、この再婚で、エムプレス=モードは、イングランドを離れ、夫のアンジュー地方に、生活の拠点を構えた。

1130年、プロア伯エティエンヌと、マティルド=オヴ=ブーローニュとの間に、長男ユースタス4世 (c. 1130-1153.8.17) が誕生した。

この長男ユースタス4世は、父プロア伯エティエンヌ (後のイングランド王ステイーヴン) の精神的な支えとなり、父ステイーヴン王が、がむしゃらに、王位継承にこだわり続けた源であった。

また、アンジューのル=マン (Le Mans) で、エムプレス=モードは、1133年3月5日、待望の男子アンリ (後のヘンリー2世: Henry II, Curtmantle, 1133-1189, 在位 1154-1189) を、出産した。

この男子アンリの誕生によって、ヘンリー1世は、王位継承者に、エムプレス=モードおよびアンリを指名し、そのことを家臣たちに誓わせた。

だが、この再婚によって、アール (Earl: アングロ=サクソン時代からのエアルダーマン the Ealdormen 地方豪族: 伯領)、バロンたちの不満は、反感へと変わった¹⁷⁾。

というのは、ノルマンディー家とアンジュー家とは、昔から領地を巡って争った、宿敵であったからである。

すなわち、この婚姻により、アンジュー家を味方にしたヘンリー1世 vs. イングランド国民、封建的バロンという構図が出来上がったのである。

16) ・C. Warren Hollister, *Henry I, op. cit.*, p. 324.

・Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda, op. cit.*, p. 56.

・George Burton Adams, *The Political History of England, Vol. 2, op. cit.*, p. 191.では、エムプレス=モードとアンジュー伯ジョフロワ4世との結婚日を、1129年6月9日としているが、本稿では、上記2点の典拠から、1129年6月17日にした。

17) David Hume, *The History of England, from the Invasion of Julius Caesar to The Revolution in 1688, Vol. 1, Reprinted of 1778, ed., Liberty Classics, 1983, p. 273.*

イングランド国民、および少数の封建的バロンの反感が、最高潮に達したのは、1135年12月1日、大好物のヤツメウナギの食べすぎにより、食中毒に陥ったヘンリー1世が、67歳で亡くなった時である¹⁸⁾。

その反感は、具体的には、ウィリアム1世の孫・ヘンリー1世の甥（妹アデラの息子）＝ブロア伯エティエンヌを、イングランド王へと、戴冠させることに変わった。

言い換えると、その反感は、少数の封建的バロンたちが、ブロア伯エティエンヌを、1135年12月22日即位させ、12月26日戴冠させ、イングランド王ステューヴンに押し上げたのである¹⁹⁾。

また、ステューヴン王の支持者には、ロンドン市民もいた²⁰⁾。

なお、このロンドン市民の支持を、まず始めに獲得したことが、イングランド王への戴冠を可能にした²¹⁾。

このイングランド王への戴冠は、以下の3つの要因により、かろうじて行うことができた。

第1は、イングランド王への戴冠にあたって、ブロア伯のエティエンヌが、ヘンリー1世の死の間際、自己を、イングランド王位の継承者に指名した、と主張していたこと²²⁾。

第2は、ブロア伯エティエンヌが、自分の異母弟、ウィンチェスター司教ヘンリーの全面協力により、教会の支持を得ることができたこと²³⁾。

第3は、ブロア伯エティエンヌが、ヘンリー1世の娘エムプレス＝モードへの、バロンの誓いが、強制された状態で行われたので、無効としたこと²⁴⁾。

このような3つの要因から、また少数の封建的バロンの支持を得て、ブロア

18) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 189.

19) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 195.

20) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 192.

21) Kenneth O. Morgan, *The Oxford History of Britain*, Reprinted of 1984, ed., Oxford University Press, 1988, p. 138.

22) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 191.

23) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 193.

24) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 194.

伯のエティエンヌは、晴れてウェストミンスター＝アベイで戴冠式を挙げ、イングランド王ステイーヴンになった。

ここで1つ注意しなければならないことがある。

それは、上述の3つの要因が存在したとしても、また多くの封建的バロンが、エムプレス＝モードの女王誕生に、反感を持っていたとしても、法的に不利であったプロア伯エティエンヌが、イングランド王に即位、戴冠できなかったであろう、ということである。

このことが実現した背景には、多くはないが、少数の封建的バロンの支持があった、ということである。

言い換えると、すべての封建的バロンが、イングランド王ステイーヴンの誕生に、賛成していなかったということである。

当然、結婚のため、イングランドを離れ、アンジューに行っていたエムプレス＝モードは、ステイーヴンのイングランド王承認に、反対した。

確かに、イングランド王国内の封建的バロンたちは、初の女王が誕生するのを嫌った²⁵⁾であろうし、またそれ以上に、少数の封建的バロンたちは、プロア伯のエティエンヌの性格が、優柔不断 (irresolute)、柔弱 (weakness)²⁶⁾であったことを熟知し、自分たちの要求を受け入れてくれる、ということを確認し、プロア伯エティエンヌを支持したのである。

また、イングランド王国内の封建的バロンたちが、初の女王誕生を嫌った理由は、女子の土地相続を認めていないサリカ法 (Lex Salica : Salic Law)²⁷⁾を多少意識して、今までノルマンディー、およびイングランドで、男系が公爵、王位を継承していたのが、途切れてしまうからであった。

ノルマンディー諸侯たち、つまり封建的バロンたちは、この女性への王位継承について、かなりの精神的違和感、反感を持っていた。

25) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 197.

26) Plantagenet Somerset Fry, *The Kings & Queens of England & Scotland*, *op. cit.*, p. 35.

27) J. R. Moreton Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, Reprinted of 1915, ed., New York: Ams Press, pp. 41-42 n. 3.

だが、封建的バロンたちは、柔弱なステイーヴン王に対して反乱を起こした。具体的には、ステイーヴン王に対する、バロンの最初の反乱が、1136年、デヴォンシャー (Devonshire) で起こった²⁸⁾。

また、ステイーヴン王に対する反乱は、ノルマンディーでも起こった。

これに対し、1137年、ステイーヴン王は、アンジュー伯ジョフロワ4世を、攻撃するためにノルマンディーに向かった²⁹⁾。

この時、イングランド王であるステイーヴンに、忠誠を誓っているグロスター伯ロバートも、ステイーヴン王と行動を共にして、ノルマンディーに向かわなければならなかった。

だが、グロスター伯ロバートは、エムプレス=モードを陰ながら支援するため、ステイーヴン王より遅れて、自分の生まれた故郷ノルマンディーに入った³⁰⁾。

この時点で、ステイーヴン王と、エムプレス=モードとの対立は、避けられないものとなった。

このような状況下を回避させるために、エムプレス=モードは、反撃に出た。

具体的に、エムプレス=モードは、ブロア伯エティエンヌの即位を取り消すために、誓約違反を、ローマ教皇に訴えた³¹⁾。

だが、ローマ教皇インノケンチウス2世 (Pope Innocentius II, 1130-43) とカンタベリー大司教とは、ブロア伯エティエンヌの即位を支持し、彼を、イングランドの王位継承者として認めた。

すなわち、1135年12月22日の即位、12月26日のウェストミンスター=アベイ (Westminster Abbey) での戴冠が、ローマ教皇とカンタベリー大司教とに支持され、ブロア伯エティエンヌが、イングランド王ステイーヴンとして、正式に認められたのである³²⁾。

このことに納得できないエムプレス=モードに、血縁関係である伯父・ス

28) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 206.

29) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 210.

30) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 211.

31) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 202.

32) Cf. Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 133.

2008年12月 川瀬 進：プロアのステイーヴン王とエムプレス＝モード

コットランド王デイヴィッド1世 (David I, 1084-1153) が、味方に付いた。

このような状況下で、当然の如く、ブリテン島内で、内乱が勃発していった。

Ⅲ 内乱

1135年12月1日、ヘンリー1世の死により、イングランド国内では、大きな2大派閥が誕生し、衝突、内乱へと発展していった。

この2大派閥とは、法的にイングランド王に承認されたとするステイーヴン派と、ステイーヴンを僭称王とし、自己に王位の権利があるとするエムプレス＝モード派とである。

この2大派閥が衝突し、その衝突のうち、エムプレス＝モード側に加勢するため、スコットランド王デイヴィッド1世が、スコットランドからイングランドに侵入し、内乱、すなわち1138年8月22日、スタンダードの戦い (The Battle of the Standard) が起こった。

このスタンダードの戦いとは、どのようなものであろうか。

スタンダードの戦いを引き起こした第1の要因は、1135年12月22日に即位、12月26日に戴冠したイングランド王ステイーヴンの性格によるものである。

というのは、ステイーヴン王の性格が、優柔不断 (irresolute)、柔弱 (weakness) であったため、封建的バロンたちに築城の機会を与えたからである。

言い換えると、ステイーヴン王の柔弱な性格が、王としての資質に不適格であったため³³⁾、少数の封建的バロンたちに、反乱の余地を与えたということである³⁴⁾。

ステイーヴン王の性格が柔弱であった、というよりも柔弱にならざるを得なかった面も考えられる。

というのは、プロア伯エティエンスがイングランド王ステイーヴンになった経緯にある。

33) Cyril E. Robinson, *England; A History of British Progress from the Early Ages to the Present Day*, Second Printing, Thomas Y. Crowell Company, 1928, p. 64.

34) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 214.

ステイーヴン王が、法的に、かつ絶大的な権力を持って、イングランド王に即位、戴冠していなかったからである。

イングランド王の即位、戴冠を、封建的バロンたちに承認してもらうために、ステイーヴン王は、彼らに特権、領地を与えざるを得なかった。

また、柔弱なステイーヴン王は、スコットランド王デイヴィッド1世との友好を得るために、デイヴィッド1世の息子ヘンリー（Henry of Scotland, 後のハンティングダン伯 Earl of Huntingdon）に、カーライル（Carlisle）とダンカスター（Doncaster）とを与える曖昧な約束をした³⁵⁾。

特権を有し、領土を授与された封建的バロンたちは、ステイーヴン王を軽視し、無許可に築城、増築を行い勢力拡大に励み、ステイーヴン王と対立、反乱を行うようになっていった。

1137年、ステイーヴン王が、アンジュー伯ジョフロワ4世を、攻撃するためにノルマンディーに向かい、そして1137年6月、イングランド軍を集結させた³⁶⁾。

だが、ステイーヴン王がイングランドを留守にしている間、スコットランド王デイヴィッド1世は、イングランド北部ノーサンバーランド（Northumberland）の領有を認める要求を、ステイーヴン王に突きつけ、イングランド北部に侵入する準備を行っていた³⁷⁾。

この情報を得たステイーヴン王は、すぐに、多くのノルマンディーのバロンたちを引き連れて、イングランドに戻った。

ステイーヴン王がノルマンディーを去ったことにより、ノルマンディーは、アンジュー伯ジョフロワ4世に支配されてしまった。

離反したグロスター伯ロバートは、再び、ステイーヴン王と行動を共にしなく、アンジュー伯ジョフロワ4世と妻エムプレス=モードを、影ながら支援するためにノルマンディーに留まった³⁸⁾。

35) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 199.

36) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 211.

37) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 212.

38) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 212.

スコットランド軍侵攻の脅威に対するために、ステイーヴン王は、1137年12月25日、北部の主要な城に、イングランド軍を集結させた³⁹⁾。

このような状況の中、ヘンリー1世の庶子のひとり、エムプレス=モードの異母兄、グロスター伯ロバートが、ステイーヴン王への忠誠を放棄し⁴⁰⁾、反対に、1138年5月、異母妹エムプレス=モードに忠誠を誓い、重鎮として反乱を企てた⁴¹⁾。

ステイーヴン王に対して反旗を翻した、このグロスター伯ロバートの行動が、スタンダードの戦いを引き起こした第2の要因である。

というのは、宿敵アンジュー家のため、ノルマンディーで兵力を増強しなければならぬステイーヴン王に対して、グロスター伯ロバートが離反することにより、イングランド軍の士気をそぎ、そして、ステイーヴン王との溝を深めたからである。

実際に、エムプレス=モードの叔父、スコットランド王デイヴィッド1世が、グロスター伯ロバートに加勢するため、イングランドに侵入した。

この侵入は、1138年8月22日に始まり、スタンダードの戦い（The Battle of the Standard）と呼ばれる王位継承戦争になった。

具体的にスコットランド王デイヴィッド1世は、イングランド、ヨークシャー、ノースアラートン（Northallerton）近くのコウトン（Cowton）に侵入した⁴²⁾。

このスタンダードの戦いは、ステイーヴン王率いるイングランド軍が、スコットランド軍を撃破して、勝利した。

また、このイングランド軍の戦いは、陣の中央の四輪車に、スタンダード（Standard：軍旗）を掲げて戦ったため、「スタンダードの戦い」、あるいは日本語で「聖旗の戦い（The Battle of the Standard）」⁴³⁾とも称される。

39) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 213.

40) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 216.

41) Kenneth O. Morgan, *The Oxford History of Britain*, *op. cit.*, p. 138.

42) David Hume, *The History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 285.

43) Andrew Lang, *A History of Scotland* Vol. 1, *op. cit.*, p. 104.

というのは、イングランド軍が、四輪車の上に取り付けた1本の竿の上に、ヨークの聖ピーター (St. Peter of York)、ビーヴェアリの聖ジョン (St. John of Beverly)、リボンの聖ウィルフリッド (St. Wilfrid of Ripon) の3聖人の聖旗を、掲げて戦ったからである⁴⁴⁾。

そして、イングランド軍は、この四輪車の周りを固めた密集軍、「鉄の壁 'iron wall」⁴⁵⁾ で戦い、この密集軍が功を奏して、スコットランド軍を撃破できたのである。

1138年8月22日、スタンダードの戦いの勝利により、スティーヴン王は、イングランド北部、カーライルを含むかなりの土地を占領した⁴⁶⁾。

だが、敗戦を喫したデイヴィッド1世は、あきらめていなかった。

勝利したイングランド内に、デイヴィッド1世、エムプレス=モードを支持する司教、アール、アールダムたちが内乱を、勃発させた。

この内乱に対して、スティーヴン王は、スコットランドとの和平を、余儀なくさせられた。

この和平は、1139年4月、ダラムで、スティーヴン王の王妃マティルド=オヴ=ブローニユが段取りをし、エムプレス=モードと和平条約を締結させ、もたされたものであった⁴⁷⁾。

その和平条約の内容は、スコットランドにとって、ノーサンバーランド (ニューカッスル (Newcastle)、バンボロー (Bamborough) を除いて) の支配権を、手に入れるものであった⁴⁸⁾。

スタンダードの戦いの勝利後、わずか1年足らずで、和平を強いらされたスティーヴン王は、イングランド国内の内乱が、イングランド軍だけでは、とうてい鎮圧できないことを悟った。

1139年6月、スティーヴン王は、内乱をヨリ鎮圧させるために、また指揮命

44) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 219.

45) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 272.

46) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 220.

47) Andrew Lang, *A History of Scotland* Vol. 1, *op. cit.*, p. 107, and pp. 127-128. n. 41.

48) Andrew Lang, *A History of Scotland* Vol. 1, *ibid.*, p. 107.

令系統をより強化させるために、国政に影響を与えていた大司法官ソールズベリ司教ロジャー（Roger, Bishop of Salisbury, d. 1139）と、ロジャーの甥リンカーン司教アレキサンダー（Alexander, Bishop of Lincoln）とが、余りにも多くの城と財宝とを所有し、ステイーヴン王にとって、脅威となったので、逮捕し、投獄した⁴⁹⁾。

ソールズベリ司教ロジャーと、ロジャーの甥リンカーン司教アレキサンダーとの逮捕、投獄は、ステイーヴン王にとって失策であった。

というのは、ステイーヴン王の実弟である、ウィンチェスター司教ヘンリーも、教会への干渉に反対し、支持を取り消したからである。

この反乱は、2年半の間、ステイーヴン王の方が優位であった。

1139年9月末日、エムプレス＝モードと、彼女の異母兄、グロスター伯ロバートとは、ノルマンディーで合流し、イングランドに侵入して来た⁵⁰⁾。

そして、エムプレス＝モードとステイーヴン王とが、1141年2月2日、衝突し、リンカーンの戦い（The Battle of Lincoln）となった。

結果は、グロスター伯ロバートの活躍により、エムプレス＝モード軍が、ステイーヴン王軍を破り、ステイーヴン王は捕らえ、プリストル城（Bristol Castle）に、投獄された⁵¹⁾。

ステイーヴン王軍は、王が捕らえられたことにより壊滅状態になった。

これに対して、封建的バロンたちが、その日の2月2日に、四方八方からやって来て、エムプレス＝モードに、忠誠の誓いを行った⁵²⁾。

1141年3月2日、エムプレス＝モードは、ウィンチェスター市民に、好意的に受け入れられ、そして、正式にイングランド女王に即位するために、ロンドンにやって来た。

49) ・Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda, op. cit.*, p. 79.

・George Burton Adams, *The Political History of England, Vol. 2, op. cit.*, p. 225.

・David Hume, *The History of England, Vol. 1, op. cit.*, p. 286.

50) George Burton Adams, *The Political History of England, Vol. 2, op. cit.*, p. 226.

51) George Burton Adams, *The Political History of England, Vol. 2, ibid.*, p. 232.

52) David Hume, *The History of England, Vol. 1, op. cit.*, p. 289.

だが、エムプレス=モードは、女王として宣言できなかつた⁵³⁾。

ロンドンにやって来たエムプレス=モードに対して、イングランド議会は、エムプレス=モードに、「イングランドの国母 ("Lady of England")」⁵⁴⁾ という称号を与えた。

さらに、イングランド議会は、エムプレス=モードに、1141年3月3日、「イングランドの国母・女王 ("Lady and queen of England")」⁵⁵⁾ という2重の称号を与えた。

だが、この称号に対して、エムプレス=モードは、やや不満であった。

というのは、エムプレス=モードは、イングランドの女王としての地位を確実にするために、ウェストミンスター=アベイで戴冠を行うために、ロンドンにやって来たのだが、称号を得るだけにとどまり、即位、戴冠までにはいたらなかったからである。

エムプレス=モードがウェストミンスター=アベイで即位、戴冠できなかつた最大の理由は、夫の救出を願う王妃マティルド=オヴ=ブローニユの強い意志と、ロンドン市民の世論とがあったからである⁵⁶⁾。

というのは、スティーヴン王の支持者が多い、ロンドン市民が、マティルド=オヴ=ブローニユのロンドン入りを、好意的に迎えたからであり、また、法外な軍費を要求するエムプレス=モードに否定的であつたからである。

その結果、ロンドン市民は、1141年6月24日、エムプレス=モードと彼女の支持者とを、ロンドンから追い払つた⁵⁷⁾。

ロンドン市民が、エムプレス=モードを、追い払えた要因の中には、スティーヴン王の異母弟、ウィンチェスター司教ヘンリーが、エムプレス=モードに離

53) Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda, op. cit.*, p. 102.

54) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 233.

55) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 233.

56) · Cf. Kenneth O. Morgan, *The Oxford History of Britain*, Reprinted of 1984, ed., Oxford University Press, 1988, p. 139.

· Cf. Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 143-144..

57) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 235.

反し、再びステイーヴン王の支持に、加わったこともある⁵⁸⁾。

王妃マティルド＝オヴ＝ブーローニュは、捕虜となっている自分の夫ステイーヴン王を、エムプレス＝モードから、救出するために、ケントで徴兵された軍隊を持つイーブルのウィリアム（William of Ypres）とロンドン市民とバロンからなる支援軍を組織した⁵⁹⁾。

その支援軍は、1141年9月14日、ウィンチェスター郊外ストックブリッジ（Stockbridge）で、エムプレス＝モード軍を破り、軍司令官グロスター伯ロバートを、捕らえた⁶⁰⁾。

捕らえられたグロスター伯ロバートはロチェスター城（Rochester Castle）に、収監された。

そして、交渉人により、1141年11月1日、ステイーヴン王は、グロスター伯ロバートと、平等交換された⁶¹⁾。

この交換により、ステイーヴン王を救出するという、王妃マティルド＝オヴ＝ブーローニュの初期の目的は、達成された。

ステイーヴン王が釈放され、再び王位の地位に就いた時、王軍は、勢いづき今度は、エムプレス＝モードを捕らえるために、1142年6月中旬彼女に掌中にあるオックスフォードを包囲し、さらに、9月末から12月クリスマス近くにかけて、オックスフォード城を包囲した⁶²⁾。

危機を感じたエムプレス＝モードは、1142年12月クリスマス近く真冬の夜の夜、あたり一面雪の中、白のネグリジェのまま、凍りついたテムズ川を、数人のお供と横切り、オックスフォード城の包囲から脱出した⁶³⁾。

このグロスター伯ロバートが、出は、良く熟知されたものであった。

58) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 235.

59) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 143.

60) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 144.

61) ・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 236.

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 145.

62) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 236-237.

63) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 238.

というのは、脱出当時、真っ暗な夜、一面大雪で真っ白、身に着けていた服は、白のネグリジェ、付き添いは、数人ということ、考え出したからである。

1145年、スティーヴン王は、ファリングトンの戦い（The Battle of Faringdon）で、エムプレス＝モード軍を破り、ファリングトン城を、掌中に収めた⁶⁴⁾。

これに対して、1147年初旬、エムプレス＝モードの息子、アンリがファミリーの運命をかけ、軍資金を持たず、数人のお供と一緒に、イングランドにやって来た。だが、アンリ軍は、小規模で、傭兵に支払うべき軍資金を、十分に持ち合わせていなかったため、とうていスティーヴン王軍には、敵わなかった。

逆に、アンリは、スティーヴン王から、ノルマンディーに帰る支度金を貰い、追い返された⁶⁵⁾。

この1145年のファリングトンの戦い、1147年のアンリの反撃は、スティーヴン王の方が勝利し、エムプレス＝モードよりも、より有利な立場に立った。

また、1147年10月31日、プリストルでの、軍司令官、グロスター伯ロバートの死により、軍の士気低下が避けられなくなったエムプレス＝モードは、戦意喪失になった。

そこで、エムプレス＝モードは、戦いを止め、1148年2月、イングランドを去り、ノルマンディーに帰った⁶⁶⁾。

1149年、再度、エムプレス＝モードの息子、アンリは、十分な軍資金を持たず、母エムプレス＝モードに、血縁関係である伯父・スコットランド王デイヴィッド1世の支援を受け、スティーヴン王に戦いを挑もうとした。

だが、この戦いも、傭兵の士気を高めるだけの十分な軍資金を、持ち合わせ

64) Plantagenet Somerset Fry, *The Kings & Queens of England & Scotland, op. cit.*, p. 35.

・ Cf. Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 149.

65) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 148.

66) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 244.

67) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 244.

でなく、またステイーヴン王の軍事力に圧倒され、アンリの夢は、水の泡として消え、ノルマンディーに戻ることを余儀なくさせられた⁶⁷⁾。

1151年9月7日、父ジョフロワ4世が熱病に罹り死亡したため、アンリが、父の後を継ぎ、アンジュー伯になった。そして、この時点で、アンリは、アンジュー伯領と、ノルマンディー公領とを手にし、巨額な富を得た。

ステイーヴン王は、エムプレス=モードの息子、アンジュー伯アンリが、巨大な領土、巨額な富を得ることに對し、危機感を感じた。

そこで、ステイーヴン王は、1152年4月6日、封建的バロンに對し、長男ユースタス4世に、今所有している領地を譲るために、次期王位継承者に指名する、という案を、ロンドンの国王大審議会に提出した⁶⁸⁾。

だが、国王大審議会は、この案を拒否した。

というのは、ステイーヴン王の実弟である、ウィンチェスター司教ヘンリーが、教会への干渉に反対し、1139年ステイーヴン王への支持を取り消しており、この事案を言及しなかったため、カンタベリー大司教を始めとする高位聖職者が、きっぱり即位式を拒否したからである⁶⁹⁾。

そして、1152年3月から8週間後、アンジュー伯アンリは、アキテーヌの女子相続人、フランス王ルイ7世(Louis VII, 1137-1180)の王妃だったエレアノール=ダキテーヌ(Alienor d'Aquitaine, 1122-1204)と結婚した⁷⁰⁾。

この不倫の結果の結婚で、アンジュー伯領、ノルマンディー公領を手にしてあるアンリは、さらにアキテーヌ公領を獲得し、巨額な富の上に、巨大な権力までも手にした。

この1152年5月に、ステイーヴン王の妻、マティルド=オヴ=ブローニユが急死した。

妻の死によって、ステイーヴン王は、多少精神的に、弱気な、なげやりのな面が出てきた。

68) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 249.

69) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, pp. 249-250.

70) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 248.

・Kenneth O. Morgan, *The Oxford History of Britain*, *op. cit.*, p. 140.

これに対して、1153年1月、精神的にも財政的にも勢いづいた、アンジュー伯、ノルマンディー公、アンジュー伯アンリは、三度、王位継承を主張するために、イングランドにやって来た。

このアンジュー伯アンリの王位継承とは、ステイーヴン王以降の王位継承を、自分に指名せよ、ということである。

この時のアンジュー伯アンリの軍事力は、船舶36隻、弓兵140人、歩兵3,000人であり、当時最大の陸軍を誇っていた⁷¹⁾。

イングランド南部の沿岸に上陸したアンジュー伯アンリは、即、重要なマームズベリー城 (Castle of Malmesbury) を、攻撃するため向かった⁷²⁾。

これに対して、ステイーヴン王軍は、マームズベリー城の前面を、塹壕でかためた。

だが、アンジュー伯アンリの軍は、マームズベリー城の塹壕周辺を、包囲した。

ステイーヴン王軍は、冬の降雪に対処することができなかった。

両軍とも、この降雪により、しばしの休戦となった。

この休戦の間、ステイーヴン王の長男、ユースタス4世が、1153年8月17日、原因不明で亡くなった⁷³⁾。

長男ユースタス4世の死により、ステイーヴン王は、精神的にダメージを受け、戦う気力を失い、なげやりになった。

というのは、その後、ステイーヴン王が、ユースタス4世の弟、ブーローニュ伯、モルテン伯 (1154年)、サリー伯 (1149年) であるウィリアム (William) に、イングランドの王位を継承させようとしなかったことから、判明できる。

また、この休戦の間、カンタベリー大司教の尽力、ステイーヴン王の実弟である、ウィンチェスター司教ヘンリーの努力で、和平協定を取り決める会談

71) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 250.

72) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 250.

73) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 251.

が、催された。

その和平協定は、1153年11月6日、ウォリングフォード条約 (The Treaty of Wallingford)、あるいは、ウィンチェスター条約 (The Treaty of Winchester) として、同意、調印された⁷⁴⁾。

このウィンチェスター条約の主内容は、ステイーヴン王が、アンジュー伯アンリを、息子として認めることを約束し、ステイーヴン王が活着している間は、イングランド王として、死んだ後は、アンジュー伯アンリが、イングランド王として即位する、ということである⁷⁵⁾。

また、このウィンチェスター条約は、その後、エムプレス＝モードに同意させ、ウェストミンスターで、確認され、承認された。

なお、このウィンチェスター条約は、1153年12月、ウェストミンスターで承認されたことにより、ウェストミンスター条約 (The Treaty of Westminster) とも言われる⁷⁶⁾。

この1153年11月6日のウィンチェスター条約の調印によって、ブリテン島で行われていた内乱が、終結した。

1154年10月25日、ステイーヴン王は、ドヴァー (Dover) で亡くなり、ケント、ファバスハム (Faversham) のクルナック男子修道院 (Clunac monastery) に埋葬された⁷⁷⁾。

1154年10月25日、ステイーヴン王の死により、協定に従い、アンジュー伯アンリが、1154年12月19日、イングランド王ヘンリー2世として戴冠した。

そこで、イングランド王にヘンリー2世が即位したことにより、ステイーヴン王 vs. エムプレス＝モードが、完全に終結したのである。

74) ・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 165.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 251.

75) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 252.

76) Kenneth O. Morgan, *The Oxford History of Britain*, *op. cit.*, p. 140.

77) ・Plantagenet Somerset Fry, *The Kings & Queens of England & Scotland*, *op. cit.*, p. 35.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 253.

IV おわりに

ヘンリー1世の野望は、1120年11月25日、法的王位継承者の長男、ウィリアム＝ジ＝アセリングが、人為的事故で亡くなり、消え失せた。

すなわち、船員による過度の飲酒の結果引き起こった、ブランシュ＝ネフ(フランス語名、La Blanche Nef: 英語名、ホワイト＝シップ、White Ship) の海難事故である。

長男、ウィリアム＝ジ＝アセリングの死後、ヘンリー1世は、王位継承問題で悩まされなければならなかった。

すなわち、ヘンリー1世の甥、プロア伯エティエンヌ＝アンリとヘンリー1世の娘、エムプレス＝モードとが、イングランドの王位継承を巡り、争ったからである。

この争いは、スコットランド王のデイヴィッド1世をも巻き込み、ブリテン島内での、内乱へと発展していった。

争いを、ブリテン島内の内乱へと拡大させた原因は、ステイーヴン王(プロア伯エティエンヌ＝アンリ)の柔弱な性格にあった。

ステイーヴン王は、イングランド国内では、過去3代のイングランド王よりも、「人が良い」と称されている。

この「人が良い」という性格の裏には、優柔不断、柔弱という性格である。

具体的には、封建的バロンやアールの言いなりになり、多くの城、教会、修道院を、築造させたということである。

この封建的バロンやアールへの言いなりが、争いを激化させて、内乱を導いたのである。

この内乱の間、封建的バロンやアールは、一生懸命戦争を行い、領地を拡大させた。彼らに附随する農民は、当然のごとく戦争に駆りだされた。

封建的バロンやアールは、戦費を捻出するために、農民にヨリ一層の過酷を強いることになった。

このことは、イングランド経済にとって、決して良いことではない。

内乱が、長引けば長引くほど、農民の生活は、疲弊するだけであった。

内乱が終結を迎えるきっかけをつくったのは、ステイーヴン王（プロア伯エティエンヌ＝アンリ）の長男、ユースタス4世が、1153年8月17日、原因不明で亡くなったことであった。

長男の死により、意気消沈となったステイーヴン王が、1153年11月6日、和平協約であるウィンチェスター条約（The Treaty of Winchester）に、敵方アンジュー伯アンリ（エムプレス＝モードの長男）と同意、調印した。

このウィンチェスター条約により、内乱が収まり、イングランド国内では、多少であるが、平穏なときが流れた。

言い換えると、プロアのステイーヴン王とエムプレス＝モードとの戦いは、ブリテン島内に、暗黒時代をもたらした、といえるのである。

また、この暗黒時代に終止符を打ったのが、カンタベリー大司教の尽力、ステイーヴン王の実弟である、ウィンチェスター司教ヘンリーの努力であった、といえるのである。

